

2014/07/10 清水孝一氏聞き取り調査

於：尼崎市立地域研究史料館会議室

午前 10 時～11 時 30 分

聞き手：尼崎市立地域研究史料館嘱託・久保庭萌、正岡茂明氏

話し手：清水孝一氏

※文中で、(久) となっているのは久保庭、(正) は正岡氏

昭和 17 年兵庫県立芦屋中学校に入学

私は昭和 17 年の 4 月に兵庫県立芦屋中学校というところに入学したんです。なんで、西宮に住んでいるのに芦屋中学校に入学したのかといいますと、今は西宮市は教育熱心なんですけど、その当時はまことに教育熱心ではなくて。私は、西宮の清水町というところに気づいた頃から住んでいるんですが、小学校卒業間近になってきて、市役所とかに母親が相談に行くんですけども、「どうせ上の学校いっても兵隊にとられるだけですわ」とか、あるいは「地元の農協さんにでも勤めなはれ。」というような勧めでね。旧制中学校ゆうのは義務教育じゃなくて、今の高等学校よりもっと数が少なかったから。周りから旧制中学校へ進めという意見もありまして中学校への進学を決めました。

伊丹や尼崎には県立中学校があるんですよ。西宮にも市立女学校があつてね。でもそこは女だけで、男は入れないということで。そんなときに、昭和 15 年、1940 年に紀元 2600 年記念で、それを記念して武庫郡精道村に兵庫県立芦屋中学校というのができるんです。

(当時は学校に通学する際) 普通は歩きなさい、二里や三里でも歩けと。もちろん電車もあつて、ケガしたときや悪天候のときはもちろん電車に乗ってもいいんです。けど、たとえ乗っても座っちゃいかん、と。それで見回して尼崎には当時立派な中学校があつたんですよ。でも電車が止まった時や歩けと言われたときに一番近いのが、出来たばかりの兵庫県立芦屋中学校で、一里ほどだったので、そこに昭和 17 年に入学しました。

中学校入学当時の様子と最初の空襲

入学したころは、まだ「勝った勝った」で、日本の方が優勢と我々は教えこまれていました。実際たくさんの版図や占領地を持っておりましたですね。しかし、(昭和) 17 年は 1 年生で、入学記念の行軍、ミニ遠足で歩いているときに、すでに第 1 回目の空襲¹がありました。それはもちろんちよろちよろっと爆弾を落とすだけだったんですけれども。ホーネットという空母からでた、飛行機(ドーリットル)が大阪や神戸にちよろちよろっと爆弾を落として行った。これはうかうかしとったらいかなあ。勝ったというてるけれどもすぐ近くまで敵が来るような状況になつとるんかなあと、その時いやな予感がしました。

昭和 19 年三木飛行場建設への動員とそこでの生活

戦況が悪くなって行って、昭和 19 年になりますと、兵庫県の三木に新しい飛行場ができる²。陸軍の飛行場でしたけれども。それを新しく作るということで、兵庫県下の中学校がそれ(建設)を担っておりました。それ(飛行場建設への動員)は長期ではなかったです。2 週間ほど。長くて一月ほど。交代で動員されて行って、兵舎が作ってありまして、そこで寝泊まりして。「ああ、軍隊の生活ってこういうもんか」と初めて知りました。

指導者は古参の兵隊さんが来ていて、食事の方式も兵隊式で。当時は毛布で、布団というのはないんですね。冬は、毛布 10 枚。夏になったら 2 枚で、春秋はその中間の枚数が支給されて。毛布で寝泊まりして、毛布を敷いて寝るんですね。普通は布団を敷くと思っていたのが、毛布を敷くと。その毛布もいまのような毛布ではなくて綿毛布で、きれいな模様入りの、子供が喜びそうな毛布も支給の中に混じってたんですね。

神戸港での荷揚げ作業

昭和 19 年の 5 月に三木飛行場の建設に行く前、19 年に入ってから話なんです、やっぱり人手が不足してしまっていて。単発的に 2~3 日ぐらいでしたか、神戸港の荷揚げをしていました。軍需物資の荷揚げとかではなく、私がやっていたのは例えば和歌山のみかん。みかんが(神戸港に)着くんです。そして、それを降ろす人手が不足してしまっていて。今と方式がちがいでね、今は 99 パーセントがコンテナ輸送だと思います。そのコンテナをもって、平たい船に積むんですけれども。その頃は船にマストが 1 本 2 本たっていて、そのクレーンで中の荷物を引き上げるんです。網を下へ降ろして、その網に荷物を人力で入れ込んで、クレーンで引き上げる。「はしけ」という小さな船に積み替えるんです。その、はしけに入れるところまでは機械。船にクレーンがついてますから行けるんですけれども、はしけから降ろすときにね、もちろんはしけにも運転手はおるんですよ。しかし年老いた、

¹ アメリカが日本を初めて空襲したのは、昭和 17 年 4 月 18 日。このときの空襲では東京・名古屋・神戸が標的となった。(『近代日本総合年表』第二版、岩波書店、1984)

² 宮田逸民「三木飛行場ノート」(『三木史談』第 29 号、1993)によると、三木飛行場は昭和 19 年陸軍設営隊によって建設着手。付近住民や勤労奉仕などの協力により 11 月頃完成した。

漁師上がりのようなおじいさんが 1 人で運転していて、そんな 1 人でみかんを担いで、それこそクレーンなんかありませんから、担いで岸壁へ場所を変えるわけですね。岸壁へ場所を変えたら、やっぱり倉庫に入れないことには盗まれてしまう。それで、動員されて三日続けて神戸港にいきました。背中に荷物を担いで。それは、勉強ばかりしている合間のレクリエーションというんでしょうか、楽しかったのを覚えています。日本パイプで機銃掃射を受けたときは、本当に死ぬ思いで、爆弾も焼夷弾も雨あられでしたけれどもね。

尼崎・塚口の日本パイプへ、本格的な学徒動員

本格的に学徒動員にいったのが昭和 19 年の 6 月の尼崎塚口の工場への動員でした。

私が住んでいる西宮の清水町は阪急より北側で、住所が阪急の線路より北側にあるものは日本パイプ³へ。それから、阪急の南に住所がある人は住友軽金属に。分かれて学徒動員に行きました。住友軽金属は当時飛行機のプロペラを作っていたんですね。

私は日本パイプの工場に行きましたが、京都の男子師範学校、それからこの近くでは関学の高等商業部の生徒も来ていました。人数は多かったですね。

— 阪急塚口駅からは歩いていかれていたんですか。(正)

ええ、歩いて行っていました。京都の師範学校の方は寮に入っていました。関学と県立は通勤です。

住友軽金属の方は、仕上がったプロペラを磨いたりするので、女学校から来ていた女子が多かった。だから、そっちに行きたいゆうておったんですわ。日本パイプのほうは、女性とはほとんど縁がなかったですねえ。

工場での様子

— 学徒動員のときは、朝は何時ぐらいにでかけて夕方は何時ぐらいに帰っていたんですか。(正)

その時でも、9 時間労働ぐらいだったように思いますけれどもね。それはもう、タコ部屋みたいに 20 時間労働みたいなんではなかったです。お昼は牛乳、かなり薄めてあったものを小どんぶり 1 杯と台湾の干しバナナ。生のバナナは 1 年半で 2 回ほど食べました。

(昼の給食の) ご飯はね、まともな色をしていないんですよ。こうりゃんと米を混ぜたご飯で。そのときはね、一見ご飯が赤いんですよ。赤飯とみまがうばかりの。それだけじゃなくて、次の日は大豆かす。これは今で言う中国東北部の旧満州国の原産だったんですね。

³日本パイプ製造株式会社(現・住友鋼管)

東塚口町に尼崎製造所があった。明治 44 年設立。昭和 13 年 3 月、兵庫県川辺郡園田村に航空機用引抜鋼管製造工場用地として 1 万 5,000 坪の土地を購入。昭和 15 年 5 月に園田村工場完成昭和 19 年 4 月に軍需会社に指定され、防諜強化のため「神武第 5951 工場」との名称となる。(『70 年のあゆみ』日本パイプ製造、1981 より)

阪急塚口駅の北東すぐに岸本吉二商店という菰樽を作っている店があって、その跡取り息子と県芦（県立芦屋中学校）の同級生であり、共に日本パイプへ動員で通っていたので、そこへ毎日のように立ち寄ってご飯を食べさせてもらっていました。お昼は給食があるんですけども、まず量が足りない。いつでもおなかが減ってるという状態で。それで、岸本さんのところは、ご自分で田んぼも作っておられるし、酒の関連の仕事をしておられたので、そこへ白いご飯を食べさせてもらいに帰りが一緒の同級生と行っておったんですね。

五大節の時はお休みで、行っても仕事は半日だけでめったに食べさせてくれない生の台湾バナナがでたり、そのときはかならず小豆の入ったお赤飯がでました。

日本の兵隊は牛馬のように酷使したといいますがけれども、実際の戦地へ行ったら補給していないからそんなことはできないけれども、内地にいた限りではその日は、練兵休という休日でお赤飯が出る。将校以上は鯛の尾頭付きなんかも出たんだと思いますよ。

日本パイプでの仕事

日本パイプでなにをしたかといいますと、私がした仕事は工程管理という仕事で、工程管理というのは品質が仕様書通りに出来ているかというのをチェックする係です。パイプをね、パイプも色々な種類があるんですけども、鉄のパイプが主でした。例えば、鉄のパイプをグラインダーという自動回転する機械にあてると火花が散りますよね。その火花の色で他の鋼材がどんだけ入っているか、標準のものが有りますので、それをはじめ標準のものを見せられて記憶していますから。火花ちらしたら、「ああこれはちょっとモリブデンの含量が少ない」とか。なんでもそうなんですけれども、その金属（単体）だけでは強度が不足したりするんですよ。

仕様書というのは、軍から指示されている仕様書ですね。製品がちゃんと出来ているかというチェック。そういうことをしております。それは、昭和19年6月から昭和20年8月15日まで行っていました。

塚口での空襲

昭和19年の12月から本格的な空襲が始まりましたけれども、そのときはB29じゃなかったように思いますけれどもね。B29も来始めていたのかなあ。ちょうど1万メートル以上の高空で来て爆弾を落としますからね、うまく当たらないんですよ。かなりの量を落とされたけれども、工場はもちこたえていました。

マリアナ基地から発進したB29の護衛のために航空母艦が日本の海岸の近くまで寄せて、そこから艦載機を発進させて。戦闘機の方は飛行距離が短いんですね。艦載機もしょっちゅう来まして。初めは、1人しか乗っていない、普通の戦闘機というのは1人で操縦するので、前しか機銃がこないんですね。なので飛行機が来ますけれども、その飛行機の来る方向を見て、その軸線から避けて溝みたいな所に入ればよかったんで、十分避けられたんです

けれども。昭和 20 年に入ったら、P38 という双胴の戦闘機がやってきまして。それはもう通り過ぎたと思ったら、後ろから撃ってくる。何人かに乗っていたと思います。大きい飛行機になるほど機関士というナビゲーターの人がいるんですよ。操縦する人の横にいて指図をする人です。だから、P38 は 3 人以上乗っていたと思います。

国鉄の塚口駅に、鉄道兵というのが動員されていて、工事をしていました。その人たちが、兵隊さんたちはカーキ色、当時は国防色とっていたんですが、そのカーキ色の服を着ていたんですが、戦争がひどくなって物資がなくなってくると、本来国防色であるべき兵隊さんの服の生地、それが染めるだけの時間、染料がなくなってきた、鉄道兵は白の服だったんです。帆布木綿を薄くしたような丈夫な生地では作ってあったんですけども。それがね、作業をしていると（敵の）艦載機から目立つんですよ。だから、鉄道兵が逃げまどうでしょ。それで、その機銃掃射にまきこまれ、塚口駅周辺で（清水さんが）死ぬような目に何度かあいました。

一 尼崎に来ていた時が空襲の激しかった時でしたか。（久）

そうですね、昭和 20 年の春以降は爆撃機 B29 が編隊を組んでやってくるんですけども、そのころにはね、日本がもう反撃してこないということがわかっているんでしょうね。500 メートルぐらいのところを飛んでいましてね。500 メートル以下に降りてくるとね、たまに鉄塔とかがあるでしょう。それにぶつかったら困るでしょう。高圧線のようなものに引っかかるので。500 メートルぐらいの高さの建物は当時ありませんから、その高さがが確実なんです。最後の方は、こちらと戦闘機に乗っている人と目が合うんですよ。それぐらい、顔が分かるぐらいの距離まで飛行機が降りてきて、機銃掃射をし、また焼夷弾を落としていきました。

なぜ初めの頃は 1 万メートルの所を（アメリカ軍の飛行機が）飛んでいたかという、日本軍が飛行機を飛ばして迎撃にいたり、高射砲から撃っていたんだと思うんですよ。今でも飛行機雲というのは、特に冬は排気がぬくくて空の空気が冷たいでしょう。ですから、白い雲を引いていて、それで、ああ 1 万メートルの高さを飛んでいるなとすぐ分かったんですけども。最後の方は B29 もかなり下まで降りてきていましたね。

それで降りてきてね、駅を目標にしてシューッと降りてきて爆弾を落とす。今日はこの工場をやろうとか、今日はこっち側とかいうように。

一 下から見ていて、集中的に爆撃されている所というのは分かったのでしょうか。（久）

ええ、分かります。それに、護衛の戦闘機がついてきて、それがもう自由に下で動いているのを撃つんですよ。私がおったのは国鉄塚口駅のちょっと南西側のところでしたけれども、その当時からあまりきれいな水じゃなかったけれども、泥水のなかにつかって、もう臭いとかそういう場合じゃないんですわ。その横をダダダダッと機銃の束がいきますから。それを避けるためにとにかく動いたらダメなんです。ちょっとでも動くと、上からは体を反転しても分かるそうで。なので（飛行機が）通り過ぎるまではぺたっと地面と一体化して、そしたら地面に寝ている人までは分からない。

(飛行機から) 見えていても、機銃の場合は回して撃ちもするんでしょうけれども、だいたい戦闘機というのは主翼の前にある機銃が主なんですよ。アメリカの方で昭和 20 年頃になってきますと、6 つぐらいありましたね。火を噴いているのを見れば何基あるのかはわかりますから。まっすぐ来る場合は、それを回避して通り過ぎるのを待つ。それでやり過ぎていたら、ある時から 1 人じゃない何人か乗っている戦闘機で後ろからぱっとやられる。本当に死ぬような目に遭いましたねえ。

B29 の爆撃は主に焼夷弾が多かったですけれども、爆弾もありました。今日は爆弾か、焼夷弾か。事前にこちらでは分かりませんからねえ。空襲警報がでると、生産をやめて、防空壕に入るんですが、だんだん空襲警報が出るのが遅くなって、爆撃が始まってから空襲警報がでることもたまにはありました。

これはね、観測体制というのがありましてね。尼崎を空襲するためには、和歌山、大阪湾の東側にそって上がってくるんですけども、紀伊半島がありますから進む方向がわかるんですね。ですので普通は早くから空襲警報が鳴るんです。日本本土にはどこも観測所がありましたし、紀伊半島の南と、東京方面だったら小笠原や伊豆などに観測所がありました。観測所がないところは観測船がありました。空襲警報を知らせるために船を配置しているわけです。50 機編隊。ですから空襲警報は普通は早く出るんですが、混乱して空襲警報が空襲が始まってからでることもありました。

— 空襲警報が鳴ってから空襲になるまでの時間は通常どれぐらいだったのですか。(久)

少なくとも、2・30 分ぐらいはありました。ですから、空襲警報がでてから避難した。避難する時間は十分ありましたですね。近くに防空壕を作っていましたから。大きな工場だったら工場の中にも防空壕を作っているんです。工場側も、万一工場がやられたら困るんで、学生たちが(防空壕の)どこに入るか、番号で決められていました。もう本当に急な場合はどこでもいいんですけども。

— どの防空壕に逃げるかという指示はあったんですね。(久)

はい、そうです。

防空壕に入っていましたね、爆撃の時はこのへん(塚口)も爆弾でやられたんですわ。線路のどっちもやられていましたね。防空壕に入って、防空壕の中は立つほどの高さはなかったのじゃがんで移動して、鼓膜がやられてしまうから、耳と目をおさえてしゃがんでいました。

1 トン爆弾もね、この線路(現在の JR 福知山線線路)の東側に落ちました。普通はね 250 kg なんです。それも、だんだん慣れてくると「ああ、あれは 250 キロや」とか、「200 メートルぐらい東やった」とかわかるんですよ。しかし、1 トン爆弾の時ですよ。もう、入っている内部の高さが 1 メートルぐらいの防空壕の中をバンバンとバウンドするぐらいの衝撃でした。そして、出てきたらもう、みんなお互いの顔を見て笑うんですけども、顔中土煙で真っ黒けですわ。

防空壕について

その当時から産業道路があって、その両脇に防空壕があったんです。駅に近いほどね、石炭ガラみたいなものがあって、地面を掘るとほんとたくさん出てきましたね。なぜその石炭ガラが出てきたのか。昔、国鉄そのものが石炭を燃料にしている、そのカスを捨てていくのが、この辺にあったんでしょうね。

— 防空壕は生徒が作ったのですか。(久)

ええ、自分たちで作っていました。昭和 17 年に初空襲があって、上からのお達しがありまして、なんせ工場でも学校でも防空壕を作らんとあかんということで。私たちがね、自分たちで防空壕を掘りました。

大きなシャベル、当時は円匙（えんぴ）といいましたけれども、それで掘りました。上にかぶせる鉄板だけは支給されましたね。重くて大変だったですけども、そこまでは持ってきてくれたんで、大勢でかぶせたりして、防空壕を作ったんです。その上にね、また土をかぶせるんですけども。そのかぶせる土がね、石炭ガラの多い土だった。このへんずっと低湿地やったんでしょうかねえ。深く掘れば元の土があったように思うけれども、ここは真土がないんですよ。深く掘って真土がでてきたら、あ、これ被しとこうかゆうてね。しかし、あんまり防空壕に適した土じゃなかったですね。

空襲の時の思い出

空襲が激しくなってきた、工場が今日はもう操業できないから、これで帰れって言われて。帰ることになったんです。その時、わたしは阪急電車でいつも帰っていたんですけど、阪急が一番やられていて。だから、国道 2 号線まででて、車に乗せてもらって帰りました。今と違って、トラックがどこでもとまってくれる。主要なところで手を上げると止まってくれるんですよ。親切に、無料で乗せてくれました。軍需工場のトラックであれ、軍のトラックであれそういう便宜は図ってくれました。下ろしてくれるのは、阪神西宮駅の近くの 2 号線のところや、戎神社の近くとか大きな交差点でした。

(逃げる際に) 産業道路のすこし高いところ (JR の高架) の上でね。火だるまになってうずくまっている、焼け焦げた人を避けて逃げました。助けるわけにいかないんですよ。助けたら自分がやられてしまうので。それで、2 号線にたどり着いて、トラックに乗せてもらいました。その頃は、ホロがついていなくて、浅い荷台で何もなし。当時は今で言う 2t 車、4t 車、8t 車くらいでした。本当にみんな親切に乗せてくれました。

— 空襲の時も 2 号線に車は走っていたんでしょうか。(久)

走っていました。空襲警報が鳴って空襲中は止まっているんですけども、電車が止まっている間もトラックは普通に走っていました。車の総台数は今から比べたら大分少ないです。また、ガソリンは貴重品ですから、大部分のトラックの燃料はガソリンではなく、木炭車に変わっていました。

野坂昭如氏との邂逅

— 日本パイプから苦楽園口駅まで帰られて、そこから自宅に戻られる途中に、ニテコ池の防空壕によられたんですか。(正)

ニテコ池の防空壕のことは以前から知っていました。一つではなく二つだったと思います。土崩れを防ぐために5メートル以上間隔をおいていました。西側から東の方に向けて掘ってありました。(その二つの防空壕が)つながっているかどうかは確かめていないんですけども、もしかしたら中でつながっていたのかもしれないですね。

そのうちの一つに、野坂昭如さんと小っちゃな女の子がおりましたですね。そこにいつから住み始めたのかは分かりませんが。

— 鯉が、浮いてくるからそれを採って食べたらどうやという話をされたのが、ちょうど空襲のあとの黒い雨が降ったときなんですね。(正)

ええ、それまでに野坂さんと、顔見知りというか、それ以前にも話を何度かしておりましたので。

— では、何度も会われていたんですか。(正)

ええ、しょっちゅうではないですけども。

西宮に空襲があった昭和20年8月6日に、空襲があった晩に黒い雨が降りましてね。翌日の朝いったら池の鯉がういていたんですね。それは、きっと動員にいて苦楽園口から帰ってきて、池の畔を友達と一緒に、三つあるうちの一番南の道を西から東へおりていく。それで満池谷のお墓へ行く角で友達と別れて、そこで私は右へ行くということが多かったんですけども、そのバス道に行くまでにその防空壕がある道のところを右折して南へ行くという道を通っておりました。

以前から防空壕の中に浮浪者が住んでいるということは分かっていたんです。それで、黒い雨が降って鯉が浮いたときには確実に話をしたんですけども。なぜ話しをしたかという、自分自身が大変おなかがすいている時代で、店にいても食べ物がおいていない。その頃は絵描きさんの喫茶店(パボーニ)ももう営業していなかったと思いますよ。昭和19年までは私もその絵描きさんの喫茶店にいていましたけれども。昭和20年にも(その喫茶店で)昆布茶を飲んだ覚えがあるんですけども、それはなんでいったのか。空襲が激しかったころではなかったと思います。

なぜ、野坂さんに鯉が浮いているぞということをお願いにいったかという、阪急苦楽園口から家に帰る途中で、三つあるうちのニテコ池の一番南の池をふと見ると、池の水面がぷかぷかしている。近づいてみたら鯉がえらい数がおったんですよ。まだ死んでいないやつもいて、空気をすったらまた池に潜っていくやつもいましたが、20匹以上はぷかぷかしていました。ああ、これだったら素人でもとれると思って。私とってみたんですけども、きっと野坂さんも自分と同じように捕るれるんじゃないかと。実際煮炊きはしていましたからねえ。その浮いている鯉を煮炊きして食べたらいいタンパク源になるんじゃないかなあと思って。知らせてあげました。

自分はいったん家に帰ってまた鯉を捕りに行って、家に持ち帰ったら母親にしかられて。「アメリカ軍の毒が入っている。食べたら死んでしまうかもわからん。返してこい。」なんていわれてねえ。その時点ではすでに鯉は死んでましたからね。池に返しにはいかないで家の前の畑に不本意ながら埋めました。

野坂さんに言ったら、彼は取りにいきましたわ。毎朝彼、身体を洗いにいくんだそうですけれども、その時は浮いてなかったけどとか言われて。でも、喜んでました。ちょっと後日行ってあれどうやった？というところまでは確かめてないんですけれども。

池は彼はほとんど毎日のようにいっているんですよ。普段身体を洗いにいってましたんで。正岡先生のスライドで、三つある池の一番南の池の東のところに半分干上がって陸地になっていた、そこに穴を掘っていたんじゃないかと言われていましたけれども、それはそうじゃないんですよ。そこで姿を見ているのは、彼はやっぱり風呂がないから、そこへ行って朝か夕方かに身体を洗ったり、顔を洗ったり、あるいは背中をふいたりしたようです。ですから彼はそこへしょっちゅう行ってたんですけれども、まあ朝いったときは（鯉は）いなかったよと。よう知らしてくれたとあって、さっそく捕りにいったはずです。食料のない時代に、貴重なタンパク源がとれるわけですから。

大社小学校の高射砲

野坂さんには関係のない話なんですけれども。大社小学校の3階建ての校舎が陸屋根になってまして、そこに高射砲がありました。高射砲台と称しておりましたけれども、りっぱな高射砲ではなかったですねえ。高射砲部隊という部隊がおりました。やっぱりそれにね、めがけて爆弾が落ちてくる。そこでね、上におった兵隊の腕が飛んできてね。バス道の西側、今は住宅地に変わってしまったけれども、そこはずっと松林になっていたんですね。そのバス道のすぐそばの所に小学校から腕が飛んできてね。私の弟が発見して、それを弟が「こんな可哀想や」ゆうて家に持って帰ってね。しかし母親は「元の場所にもどしてこい。返しにいけ。返しに行け」ゆうて。弟と2人で元の場所にそおっとおいてきました。何人か戦死者は出たみたいですねえ。（落ちていた腕の服は）軍服だったんで、兵隊さんの腕だったと思いますよ。そんなこともありました。

— 大社小学校はそういう意味では、越水の山の上にあって見張り台としてはすごくいい場所ですよ。だから逆に飛行機からは狙われやすい。（正）

ええ。撃たなくていいのに撃つんですよ。そしたら敵もね、ちょっかい出されたらやり返さないとしょうがないでしょ。

おかげで私の家もその時は半壊。トイレや廊下等に爆弾の破片が何ヶ所も突き刺さってました。その家も平成7年の阪神淡路大震災で全壊し、今はありません。

清水孝一氏 略歴

- 昭和 4 年 西宮市生まれ
昭和 17 年 旧制兵庫県立芦屋中学校入学（第 3 期）
昭和 22 年 同校卒業（5 年制中学を卒業）
昭和 26 年 旧制官立京都繊維専門学校卒業
（現 京都工芸繊維大学）
昭和 26 年 鐘淵紡績株式会社入社
昭和 61 年 大日本蚕糸会より蚕糸功労賞受賞